

・ 93年地理学教室の行事記録	1
・ 卒業論文公開口頭試験について	1
・ 非常勤講師の先生から	2
・ 3年生巡検報告	2
・ 特別寄稿：新疆ウイグル自治区旅行記	4
・ 国土館大学図書館にあるパソコン用ソフトの一覧	7

【93年地理学教室の行事記録】

- 2月15～17日 平成4年度 卒業論文公開口頭試験  
2月22～24日 国土館大学地理学会冬季巡検（伊豆大島で地形・地質観察：長谷川、内田）  
5月17～18日 1年生巡検（埼玉県寄居町：長島、瀬戸、野口、長谷川、内田）  
6月4日 9月卒業公開口頭試験  
6月5日 国土館大学地理学会（於鶴川キャンパス・メープルホール）  
《講演会》澤口晋一先生「スピッツベルゲン調査紀行」  
《就職ガイダンス》山崎徹氏（91年度卒、(株)オオハ勤務）  
6月19日 国土館大学地理学会巡検（奥多摩三頭山で植生観察：水野一晴先生、増沢直先生）  
7月25日 国土館大学地理学会巡検（東京・千葉ウォーターフロント：長島）  
9月16～18日 国土館大学地理学会夏季巡検（会津田島の自然：長谷川、内田）  
10月12～15日 3年生巡検（神戸市：長島；宇都宮市：瀬戸；高山市：野口；  
福島県会津田島町：長谷川；京都市：内田）  
12月2～3日 2年生巡検（富士吉田市・河口湖町で都市気温調査と景観調査：  
長島、瀬戸、野口、長谷川、内田）  
12月11日 国土館大学地理学会（於世田谷キャンパス）  
《講演会》瀬戸玲子「新疆ウイグル自治区見聞録」  
《ゼミ発表》大鹿公德、石川太郎、田村寛子、村松篤盛、安藤達志

【卒業論文公開口頭試験について】

地理学教室では、卒業論文の審査が公平になされるよう各々の論文を2名の教員が閲読し、さらに公開口頭試験の結果を加味して合否を決めています。

今年度も2月15～17日に卒業論文の口頭試験が行われ、試験の結果から卒論の評点が決まります。公開試験なので1～3年生も出席し、今後の参考にする必要があります。なお、3年生は全員出席が義務づけられています。

試験は、持ち時間10～15分の口頭発表とそれに続く質疑応答です。発表者はあらかじめ卒論の要旨、図表などをまとめたレジュメを用意し、出席者全員に配布できるように準備してください。レジュメには当然のことですが、表題・日付け・発表者名・図表番号などを明記してください。また、質疑応答の際に必要な卒業論文のコピーは必ず持参してください。

就職が決まり、試験当日に社内研修などが予定されている4年生は、就職予定先に事情を説明し、研修欠席の手続きを済ませておくようにしてください。

**重要事項！必ず読むこと！**

研究室、図書館から借りだしている書籍・備品は口頭試験の前（1月初旬）に必ず返却して下さい。  
未返却者は、口頭試験が受けられません。

私は現在、群馬大学教育学部で都市地理学と地理教育の科目を担当している。大学時代の卒業論文は都市地理学で、以来、今日まで都市地理学の研究を続けているが、群馬大学勤務以後は地理教育の研究も手がけ、特に、児童生徒の地理意識の発達と地理教材の開発をテーマとしている。地理意識発達の研究は10年来継続し、今その成果をまとめている。地理教材開発の方は、ここ数年の研究成果を「シミュレーション教材の開発と実践—地理学習の新しい試み—」（古今書院1993）として出版した。最近では、郷土唱歌（地理唱歌）、郷土かるたなど郷土・地域にも関心が向いており、小稿もそれに関わるものである。

有名な群馬県民謡八木節のルーツは新潟県の新保広大寺くずしで、それが上州の木崎音頭（日光例幣使街道木崎宿、現群馬県新田町）となった。この街道の馬方で天性の美声の持ち主「掘込源太」は木崎音頭をこの地の風土・気質に合うように改良・創作し、街道の行く先々で歌い広めた（明治後期）。これが八木節である。源太は栃木県足利市掘込の出身で、民謡名の由来となる例幣使街道八木宿も足利市（掘込のすぐ近く）にある。そのため、足利市では八木節の本家は足利であり、八木節は栃木県の民謡であると主張し、その由来についても通説とは異なる解釈をし、群馬県に対して強い対抗意識を抱いている。

私が注目するのは、掘込・八木地区は群馬県と地続きで、足利中心部とは渡良瀬川を介していること、足利の方から見れば、渡良瀬川を越えた群馬県側に飛地のように掘込・八木が位置することである。つまり、掘込・八木は地形的に群馬県と一体であり、歴史的にも街道沿いに群馬県側と関係深い。ところが、そこに県境があったため混乱・対立が起こった。もし、群馬、栃木の県境が渡良瀬側であれば、このような事態は生じなかったであろう。ここに実質地域と形式地域の確執、そして、郷土意識に及ぼす形式地域の持つ重要性を見ることができ、形式地域とは単なる「形式」だけではないのである。

## 【3年生巡検報告】

## 長島ゼミ神戸巡検報告

肥留間 広幸

我々長島ゼミ（ゼミ長のSを筆頭とした22名だ）は、今回、5つのゼミの中で「一番速いのでは」と噂された兵庫県神戸市で長く苦しい巡検は行われた。

巡検のスタートは集合場所の神戸駅である。集合に遅れたものは一人もいなかった。「おっ皆やる気があるぞっ」と思ったのもつかの間、市役所へ向かった人の中には右往左往する人、御役人様を困らせた強者が……。とにかく初日は、資料の物色に精を出す人がほとんどだったようである。成果のあった人もなかった人も、夜には須磨の浦に面した国民宿舎「須磨荘」に帰ってきた。食事などが終われば「長島先生との交流会（ミーティング）」だ（毎夜あった）。この時間は、自分の調査と予定の報告、先生からの御指摘という辛く、なおかつ有り難いものである。中には「夜中に須磨の海に入らないように」と先生からきついお言葉もらった人が何人かいたようだ。他のゼミはミーティングが終われば酒盛りをしたようだが、禁酒令が布かれていたので、我々はカードゲームで盛り上がった。

さて、3年の巡検は、各自でテーマを決め、行動するので、2日目、3日目に彼らがどのような調査を行い、またハプニングがあったのかは、ミーティングと普段の会話から推し量るしかない。ある人は農村・住宅街などで聞き取り調査。ある人は役所・企業などの人と会話。またある人は観光…えっ…。そして調査が終わって……。充分データ・サンプルを得られた人。本当に「須磨の海に入る」ような結果になった人。移動だけで何時間・何千円もかかってしまった人。話好きの人につかまってしまった人（先生曰く「ボランティアです」）。禁酒令の反動か、灘の酒の調査中に現地の人からすすめられてお酒を口にした（少しだと言っている）人、などなど様々であったようだ（私も上のいずれかに当てはまる）。

最終日は、集合時間まで調査をしたり、図書館・市役所に缶詰めであったりと、これまた様々だ。集合時間には何人か姿が見えなかったが一応解散となった。これで巡検は終わったが、1か月後のレポート提出まで苦悩は続くのであった。

余談：今回の巡検で先生の御足に不幸が襲った。あな、恐ろしや。神戸では須磨荘と須磨の浜が行動範囲となった先生であった。後日、医師から「治るのに若い人は1週間で、年配の方は数週間かかる」と言われたそうだが1週間で治ってしまった。先生の若さが証明された。

## 瀬戸ゼミ

押田 大助

私たち瀬戸ゼミは、10月12日から3泊4日で栃木県宇都宮市へと巡検を行った。私たちは宇都宮市内を中心に

那須野原まで、工業団地、宇都宮市の都市構造、繁華街、地価の変動など、それぞれのテーマを決めて調査した。我々のゼミは総勢8名という、少人数のゼミのため、とてもまとまりがあり、3泊4日の巡検も大変順調に行われた。各自の調査内容は次の通りである。

金子正昭「宇都宮中心部の土地利用構造」

押田大助「宇都宮中心地区における繁華街について」

田村寛子「地方都市におけるコンビニエンスストアの現状とその周辺のコンビニエンスストアの配送ルートについて」

白井謙志「宇都宮における住宅地地価」

溝口 光「宇都宮平出工業団地について」

内山仁志「地方主要都市周辺の市町村の工業進出に伴っての人口・土地利用の変化」

野口光博「宇都宮周辺の水辺環境」

高砂 修「大田原市におけるミヤコタナゴの棲息環境」

## 野口ゼミ報告その1「のんびりしていたいいわけ」の巻

沼田 典子

巡検前。巡検の準備で忙しそうに図書館へと向かう他のゼミ学生をよそに、野口ゼミの学生はのんびりと過ごす。

巡検後。以前にも増して忙しく走り回っている他のゼミ学生をよそに、巡検中に撮影したスナップ写真をニギヤカに交換する。…ように見せておいて、ゼミ員に配布する資料を作る。つまり、「ゼミ旅行なんていいなあ」とイヤミのひとつもあつたがそれは仮の姿で、正体は多忙なのであつた。(ふっはははは…)

なぜ端から見て「ゼミ旅行」だったのか。それはゼミ員17人が一丸となって、一つの疑問を解決するために立ち上がったからであつた。その疑問とは『人口が6万人台である高山の気温上昇率が神戸よりも高い』である。つまり、都市規模とヒートアイランドとの関係を高山で調査したというわけだ。(…ふっ、すばらしい)

様々な角度から調査するために班ごとに担当を決められ、もとい、分担した。資料は東京に帰ってから出し惜しみせず、すべてを全員に提供しなくてはならない。それらの資料を完成した班から順次配布したため、全部の資料が揃うまでに時間がかかり、ぼけっとしていたわけですね。(資料がなくても出来ることはある。なんていっちゃあいけない)

さて、12日。はるばる東京からきたその夜に全員で気温の観測をしたのはよいが…見知らぬ街の夜道へと観測コースの下見もできないまま出かけてしまったもんだから、時間になっても民宿に帰れず、野口先生の「お迎え」でやっと帰りついた班がちらほら。観測の報告会が終わると夜もふけてしまった。が、翌朝4:30には出発して気温観測。もちろん早朝の観測までゆっくり休むなあてありえなかつた。

夜と早朝(日の出前)と2回の観測が終わると、次は観光客を装って自転車にまたがり観光地・高山を満喫しながら(?)観測結果の裏付け調査を開始。「様々な角度」とカッコはいいが実は似たり寄ったりで、行き先はみな市役所。しかもそのほとんどが都市計画課であつた。ここでは「国土館大学の学生ですが…」と入れ代わり立ち代わりやって来るといふ迷惑そうな光景を垣間見ることができた。中には資料を写している間に3時になってしまひ、しっかりとお茶をご馳走になって帰る班もあつた。

野口ゼミ恒例の瀬候所見学では瀬候所の仕事内容や観測機器等の説明を受けた。北海道南西沖地震が高山の地震計にしっかりと記録されていたことは驚きであつた。

民宿の食事は「初日だけ豪華なんだよ」とおっしゃつた野口先生の予言は残念ながらはずれてしまい、毎晩食卓いっぱいには食事がならんだ。皿数があまりに多いため2日目・3日目になると、食事の最中に「?!。味噌汁が自分のところだけない」とか、「あのお、味噌汁のおかわりはありますか」とか(断られた)、「ごちそうさま。…あれれ、おれのところに刺身の皿がなかった」などなど。ボケのオン・パレードで実に楽しい食事だった。

ハプニングをあげればきりが無いが、それにしても、あれだけ毎晩夜更かししながら昼間の調査をこなしてしまふゼミ員のタフさは、巡検の成果と同じくらい大きな発見であつた。

なお、「巡検の成果の報告その2」は12月のゼミ発表までの内緒なので、ここではそれ以外について野口ゼミのマイノリティー、沼田が報告しました。

## 長谷川ゼミ会津田島巡検

千葉 哲志

10月12日、会津田島駅到着したのは、すでに12時43分。もうこの時点で私を含めてほとんどの人は、グッタリ状態のようでした。皆さん5~6時起きなのです。先生はそれを悟ってくれたのか、1日目はフィールドワークはなく、各調査地の資料集めとなりました(長谷川先生もその一人だったかもしれない)。

あらかじめ調査内容の違いによって分けられた3つの班は、それぞれの調査地の資料(大縮尺図・集落の戸数・山林状況など)を役場で収集しました。ちなみにその3つの班とは、加藤谷川における河岸段丘の調査を中心とした「地形班」、赤穂原川の水質測定及び流速測定を行う「水質班」、台鞍山スキー場の土壌調査を行う

「土壌班」です。収集が終わり宿舎に到着後は、長谷川先生による簡易測量講座が開かれ、測量の楽しさとフィールドワークにおける測量の重要性を学びました…。

10月13日、地形班は、長谷川先生という強い見方を引き連れ露頭調査へと出発しました。草をかき分け、崖によじ登り、泥だらけになりながら過酷な調査を進めるうち、疲労や苦痛を超越した何かを感じました。それが何なのか判明する間もないうちに日は暮れ、そして夜がきました。夜は毎晩ミーティングを行いそれぞれの班の調査内容をまとめそれを発表し、明日の調査予定を明確にすることを中心に行いました。

3日目、長谷川先生は、午前中は水質班、午後は土壌班に同行し調査を進めました。一方、地形班は、前日に続きあらかじめ空中写真から判読した段丘面を構成する礫とマトリックスのサンプル収集、露頭のスケッチを中心とした作業を進めました。

もう800字を越えたので最終日です。先生の粋な計らいで、駒止湿原の散策となりました。ここで湿原における植生を学び、また紅葉の美しさを堪能しました。

この巡検で予備知識（いかに文献を読んでいるか）及び下調べの重要性を知りました。また、調査の方法や、技術を学ぶという意味では、大きな収穫となったことは間違いないでしょう。

## 内田ゼミ巡検報告

村松 篤盛

「パリやニューヨークよりも、京都に詳しいほうがカッコいいかも知れない」、「そうだ 京都 行こう。」（J R 東海：1993）ということになりまして、内田ゼミ8名（先生を含む）は、平安京遷都1200年を迎える美女の都「京都」で巡検を行いました。

ある者は祇園で舞子さんを追いかけ、ある者は市内のお墓をスケッチしまくり、またある者は土産屋巡りをしたり、7名それぞれが、自分で決めたテーマについて、終日調査に明け暮れました。

宿舎となった「京都セントラル・イン」の部屋は、ごっつ狭かったので、ミーティングは中華料理の「王将」で、餃子争奪戦と並行して行われました。店が混雑し始め、店員の「はよ出てってくれへんやろか」という視線攻撃&「お下げします」攻撃&さらに強烈な内田先生の怒涛の質問攻めに合い、まるで某サッカーチームのごとく防戦一方のミーティングでした。

今回の巡検で、どれだけの人がついたか疑問ですけど、その労力は1・2年次の巡検とは比べものになりません。そこで、細やかではありますが、1・2年生にアドバイスします。

まず、事前の準備をしっかりしとかな、あきませんよ。とくに、アポイントは必ず取ってくださいね。私の場合、京都市内の3つの中学校でアンケート調査を行ったんですけど、なかなか協力してくれる中学校が無くて、何度も何度も依頼の電話をかけました。しかも、平日昼間でっせ。電話代がなんぼしたかは、あえて言いませんけど、あんなに可愛がっていた福沢諭吉ちゃんが、いとも簡単に出て行ってしまった、と言えば、見当はつくでしょう。しかし、そんなことは言うてられません。なにしろアポ無しでは、調査そのものができひんかった訳ですから。だから、多少の金銭的な負担はかかりますけど、調査を成功させるために必ずアポイント取ることを勧めます。

次に、調査地のおおよその地図を頭に入れてください。また、交通機関のチェックも必要です。田舎行けば、3時間に1本しかバス来一へんときあるし。無駄に時間を費やさへんよう、綿密に計画してくださいね。

1・2年次と3年次の巡検の大きな違いは、事前準備にあると思うんです。そやから1・2年生の皆さんは、以上の点を踏まえて、格調高い意義ある巡検をしてください。ご健闘を祈っております。

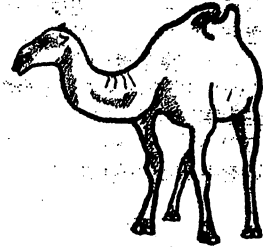
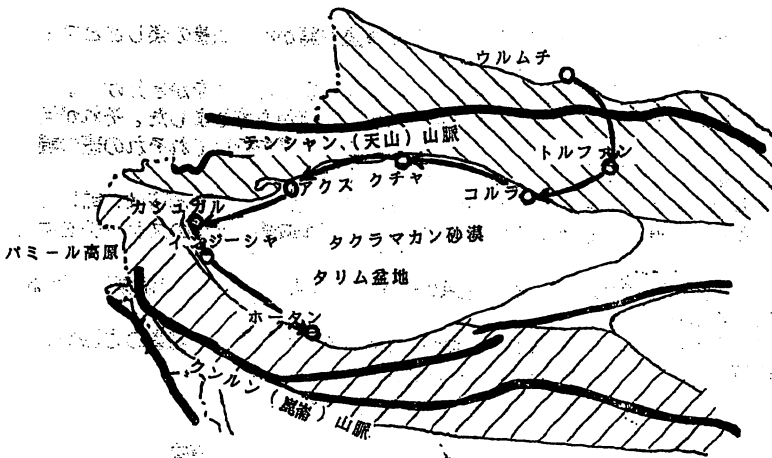
## 【特別寄稿】

### 新疆ウイグル自治区旅行記

瀬戸 玲子

今年8月13～27日、中国の新疆ウイグル自治区を訪れた。ウルムチからトルファンを経てタクラマカン砂漠をもつタリム盆地に入り、天山山脈の麓を天山南路沿いに西へコルラ、クチャ、アクス、カシュガルと進み、ここから南東へバミール高原、崑崙山脈の麓を西域南道沿いにホータンまで、またカシュガルに戻ったのでバスの走行キロは3,500kmに及んだ。この道沿いは山脈とタクラマカン砂漠の接する所であり、高山の雪解け水や山麓の扇状地末端の融氷が得られるため、都市や村落が立地し、耕地が開け、このオアシス（緑洲）を連ねて古来からシルクロードが開けていた。

真夏の大陸砂漠の日ざしは強烈で、特にトルファン盆地最低部は海面下-155mであるため、温度計は45°、日影でも41°になったが、からっとしているのに耐えられないほどでもなかった。タリム盆地は標高1,000mあるため朝夕は涼しく、夜は寒いほどだった。雨にも出会った。今年は雨が多いとかで、2か月前、あるいは2週間前の大雨で道がこわれ工事中の所や、でこぼこの迂回路を廻される所もあった。道路は洪水を避けるため周りより高



くしてあり、排水をよくするため道と直角方向に溝を平行してつけてある。強い風が砂塵を巻き上げ、前方がよく見えないこともあったが、この程度のもは砂嵐のうちには入らないという。

乾燥気候で植被が殆どない山地は、岩石の鉱物成分の色丸見え、単斜あるいは褶曲の地質構造丸出しで、浸食、風化作用がリアルに出ているから、森林に覆われた山を見慣れた眼には興奮を覚える。トルファン盆地の中央部にある火焰山は、幅10km、長さ40km、標高500mほどの山脈で、赤色砂岩からなり植被が全くなく、こまかいむだに朝夕は影がついて特に美しい。天山山脈の南麓を行くときは5,000mをこえる高山が真っ白な雪をかぶり、前山が赤、白の帯、別の所では、だいたい色、褐色、黒緑、赤、白の帯になっているのをみた。カシュガル近くの低い山越えの所では、黒、白の互層に地質的な断層が入って市松模様になっていた。ホータンの白玉川の河原にもいろいろな色石があった。クチャ近郊の塩水溪谷では、硬軟互層が傾斜して硬岩部分が突出していたり、蜂の巣状だったり、造形の妙を展開していた。この溪谷は例年なら塩の吹き出した河原ということだが、今年は雨がも多く、赤茶けた水が流れていた。近くには水平な地層の裸出した山があり、クチャのグランドキャニオンというとか。

タクラマカン砂漠という砂丘にらくだのキャラバンが行くイメージがあるが、大きな砂丘が幾重にも重なったのを見たのはホータンの北西郊外に日の出を見に行った時くらいで、ここではきれいな稜線や風紋のついた砂丘がみられた。タクラマカン砂漠の内部までこのような砂漠が続くのか、ホータン～ウルムチの飛行機から見られると期待していたが、カシュガルへ車で戻ることになったので確認できなかった。道沿いは殆ど礫のごろごろした低平なあるいは1～2mの浅い浸食谷をもつ台地である。この平坦地は、硬軟互層の水平層が傾斜したまたはゆるやかに褶曲した地層が浸食されたようで、硬岩部分が1m位の直線状の高まりとなって延々と続いているのがみられた。ここでは礫からなる砂漠を「ゴビ」といい、砂からなるところを「砂漠」、礫と砂からなるところを「ゴビ砂漠」、ゴビが局所的にあるところを「ゴビたん(灘)」と使いわけ、我々が「ゴビ砂漠」を固有名称として使うのとはちょっと違うようである。

道は山麓と平地の境を通るので、ワジを横切ることが多い。山麓には扇状地が並び、植被がないので氾濫した跡に塩が吹き出して白くみえる。砂漠の中にも凹地や池があり、湿地では粘土が乾いて亀裂をみせたり、塩を吹き出したりしている。

砂漠は全く砂礫だけの裸地、らくだ草が点在するところ、タマリスク(紅柳)の灌木が生えているところ、湿地に葦や短い笹が生えているところなどがある。タマリスクは細い穂に赤い小花をつけていた。谷間にはオリーブに似た実をつけた砂なつめや、しだれでない柳が生えている。

崑崙山地から流出する大きな川は雪解け水で水量豊かであり、トルファン、コルラ、クチャ、アクス、アトエ、カシュガル、ホータンなどの大きな町は大きな川のそばに立地している。上流には水力発電所やダムが建設されている。トルファン盆地は天山山脈からの地下水が豊富で、カルジンによる灌がいが発達している。農家の庭先の階段を下りてゆくと、トンネルの前に水汲み場がある。砂漠の中に30mおきくらいに小丘が並んでいるのは、縦穴を掘った土を盛り上げたものである。地下水が枯渇して放棄されたカルジンの縦穴も見た。その辺りの農家はカシュガル市内に移住したという。

オアシスの都市や集落を通る道沿いにはポプラ並木があり、その裏には用水路が通っている。ポプラは成長が早く、道路や用水路を砂塵から守り、日影をつくる。集落をはずれたところでも数列のポプラの幼木を植えている。根元に溝をつけ、雨水が集まり、滞留しやすいようにしている。

トルファンにはぶどう畑が多い。丈が低く、小粒の種なしの淡緑色のマスカットで、摘んで籠に入れ、ろば車に山と積んで運ぶ。みずみずしく甘い。生食用のほか干ぶどうにする。土れんがを市松状に積んだ四角い建物の中に竿をたて並べ、ぶどうの房をびっしり下げ、高温と乾いた風で自然乾燥させる。ぶどう干しの小屋が公園住宅のように並んでいるところもあった。ちょうど収穫期のラグビーボールのようなすいかやハミ瓜を毎日バザー

ルで買って食べたが、乾いた喉においしかった。

オアシスの畑ではどうもろこし、じゃがいも、ひまわり、棉が多く、麦は刈り取ったあとである。カシュガル～ホータンでは水田が多いのに驚いた。用水路さえあれば夏の高温で水稻が栽培できるわけである。麦の刈り跡や砂漠の僅かの草地には羊の放牧をしている。牛や馬の放牧もあるが、らくだの放牧をみるのは稀である。カシュガル近郊で農家を見学させてもらった。ポプラ並木に用水路が平行したうしろに土れんがの塀が続き、土れんがの門をはいるとすぐ居宅で、塀が家の壁を兼ねている。炊事場は外でかまどや井戸がある。中庭にはぶどう棚があり、地面にすいかやハミ瓜がびっしり並べてある。木戸の奥は果樹園でザクロ、あんずなどが植えられている。作業小屋の外では大きなナンをかまどで焼いたり、羊の毛でフェルト状のカーペットを製作していた。

車が町に近づくところから出てきたかと思う程ろば車がふえる。家族をのせバザールへ向かうのである。大きな都市には大きなバザールがある。中でもカシュガル郊外の日曜バザールは中央アジア最大といわれ、朝暗いうちからろば車に荷を積んで続々と集まってくる。スイカ、ハミ瓜、ぶどう、トマト、にんじん、青菜など青果物の豊富なこと、羊の肉がぶら下がり、穀物、香辛料、パン。赤い卵はゆでたもの白いのは生。嫁入り道具の金ピカの長持、赤青の大きなそろばん玉のついたポプラ材で造った子供用のベット、雑貨、布地等の店が表通り、裏通りを埋め、買物客でごったがえす。町の中心には常設のバザールもある。職人街には伝統的家内工業の店が並び、家具、民族楽器、水瓶、ブリキ・ポプラ材などの加工をし、販売している。カシュガルはシルクロードの十字路で、古来から交易の中心地であった。ホータンも交易都市であり、伝統的工業の絹織物、じゅうたん、ぎよく(玉)の加工場も僅かながら残っている。カシュガルの南東にあるインジーシャは小刀で有名な町である。

オアシスの農家は土をこねて長方形にし天日干しれんがを積んだ四角な家で、小屋や塀もこれである。商店や改築した家は焼れんがを使っている。トルファンの変河故城は二つの川にはさまれた台地に立地したB.C. 2世紀からA.D. 14世紀の都市遺跡であるが、土れんがを積み、葦のマットを所々に挟み、上に泥を塗った建物群が残っている。クチャのクズルガハ土塔(漢代の烽火台)やスバシ故城の西寺の跡、カシュガル近郊のハンノイ遺跡の仏寺跡、ホータン近郊のマリクワット故城いずれも土れんがである。

シルクロード沿いの少し奥まった所にはあちこちに仏教石窟がある。トルファンへのゼクリク千仏洞、土峪溝千仏洞、クチャのキジル千仏洞、クムトラ千仏洞、クズルガハ千仏洞など、掘りやすい砂岩の山腹や川沿いの崖の上の方に窟が並んでいる。中に仏像を安置し、仏教関係の彩色壁画をえがき、丸い天井や側壁上部に千仏をえがいた。イスラム教徒の侵入により顔は殆ど削られ、仏像や美しい壁画はドイツなどの探検隊に持ち去られた。内部は写真撮影禁止で、限られた窟しか見られないが、笙や笛、五絃の琵琶をもった飛天やお皿の踊りの壁画が残っている音楽堂を高い料金を払って見せてもらった。

新疆ウイグル自治区はウイグル族が2/3を占め、カシュガルでは90%を占める。ウイグル族の男は白と黒または緑の模様の縁なし帽子をかぶり、女は、きれいな刺繍をした縁なし帽子があるが普段はスカーフをかぶり、赤、桃、黄色、緑、紫、黒の混った矢がすり模様のワンピースをきている。旧ソ連の中央アジアでみたのと全く同じである。焦茶のペールをかぶった女性は少しみられるだけで、他のイスラム圏に比べ戒律がゆるやかなようである。イスラム教の大きな寺院はトルファン、クチャ、ホータンでもみだが、カシュガルのエイティガル清真寺は新疆最大で、建物内で2,000人、庭も含めれば7,000人が礼拝できるという。しかしここに入れるのは男性のみである。内部は他のイスラム圏の国に比べ簡素である。エイティガルとは楽しい広場の意で、コルバン節には寺院の前の広場に7万人が集まって踊るといふ。門前には民族楽器、インジーシャの刃物、丸い桶にいちぢくの葉を敷きその上に並べたいちぢくの砂糖漬けなどの土産物屋が並ぶ。ここでは漢民族とウイグル族の子供の学校は別で、ウイグル族の子は学校で中国語を学ぶ。看板などウイグル文字が多い。アクスではちょうど夏祭りの日にあたり、広場で夕方から24時まで、13の民族の祭典がくり広げられた。ちなみに中国では北京の標準時一つに統一されているので、経度差30°もある新疆ウイグル自治区では生活時間を2時間ずらしている。

昔のシルクロードは、コルラの鉄門関の川沿いの細い道など断片的に残っているが、今は広い舗装道路で、カシュガル～ホータンなどどこまでも直線道路が続く。区間ごとに分担し、飯場を移動しながら改修工事をしている。トルファンから西へは石炭を積んでゆくトラックが多かった。コルラから砂漠の中の方に分かれる道は石油基地へ行くものであった。石油の採掘機も所々にあった。カシュガルにはクンジュラ峠を越えてパキスタンから12輪トラックがきていた。カシュガル、ホータン、コルラ、アクスなど大都市は道路を拡張し、古い家をとりにこわし、新しい2階建てや高層ビル、住宅団地などの建設ラッシュであった。

【教室にあるパソコン用ソフト一覧】

▼PC98用、DOS/V用ソフト

日本語MS-DOS (Ver3.3B) 基本機能セット  
日本語MS-DOS (Ver3.3C) 基本機能セット  
日本語MS-DOS (Ver3.3D) 基本機能セット  
日本語MS-DOS (Ver5.0) 基本機能セット  
縮小名人 (縮小印刷プログラム)  
地図をください (多機能世界地図システム)  
dBASEIII PLUS (日本語データベース)  
一太郎Ver5 (日本語ワープロ)  
花子プロック出力ツール  
JUSE-QCAS (品質管理支援システム)  
GDAS (グラフによるデータ解析)  
Thirty (3次元パーソナルCADソフト)  
VZ Editor DOS/Vバージョン (テキストファイル用スクリーンエディタ)  
WXII+ DOS/V版 (日本語FEP)  
WINDOWS V.3.1 (OS)  
WORD V.5.0 (日本語ワープロ)  
1-2-3用V-Textドライバ  
地理学文献目録第9集 (1987-91)  
「地理」総索引1-36  
滋賀県環境アトラス  
リモートセンシング (OM-SAT)  
ひまわり受信処理  
ノア受信処理  
FDマップ (国土数値情報ファイル)  
数値地図表示・閲覧ソフトウェア

▼XYプロッター用ソフト・デジタイザ用ソフト・データロガー用ソフト

TRACE (マイタプレット応用ソフトウェア)  
CRD1 (マイタプレット応用プログラム)  
TDG1 (3次元グラフパッケージ)  
BGP2 (ビジネスグラフパッケージ)  
TECG1 (テクニカルグラフパッケージ)  
MEAS1 (図形計測プログラム)

※このほかに教員が所有するソフトがあります。個別にあたってください。